

先・原史地域の諸問題

小野 忠 熙

は し が き

近年、わが歴史地理学界は、あたかも歴史地理学のルネッサンスとも言えるほどの隆盛をみ、その躍進のために発達史が書かれたり、海外の研究が紹介されるとともに、理論的な基礎づけや実証的研究に多くの努力が払われている。

小牧実繁博士にはじまる先・原史地理学の領域は、広義の歴史地理学のなかに含め、藤岡謙二郎先生をはじめ諸先学によって推進されている。ことに戦後、基礎的資料を供与する考古学や第四紀学など隣接諸学科の研究が進んできたので、年々新たな知見を増し、斯学の研究も次第に容易になってきている。

本稿では、実証的研究に携る立場から、先・原史地理学における時間的区分や人文地域の問題について、若干の考察を試みておくことにする。

一 先・原史地理学における時間的区分の問題

化石化した過去の地域を研究する先・原史地理学の場合、その対象の厚みある空間を、時間的にどのように区分したらよいかということが問題になる。

(一) 考古学における時代区分 まずはじめに、先・原史地理学に基礎資料や、時間的区分の指準的文化化石を供与

する考古学の時代区分を見ておこう。わが国の考古学界では、同一時代の文献的記録の有無を基準にした G. de Mortillet の三時期説に、石器・青銅器・鉄器といった利器によって三時期に分ける C. J. Thomsen の説を勘案し、大きく先史・原史・歴史の三時代に区分している。①すなわち、石器を使用した縄文文化と、金属器を併用した弥生文化②の時代を先史時代、鉄器が普及し、貴族や豪族の高塚墳が築造された古墳時代を原史時代とし、同一時代の文献的記録が残っている律令時代ないしは奈良時代以降を歴史時代として区分する方法が使われてきた。

ところが戦後、洪積世の人類③や、旧石器文化の存在④が明らかになって石器時代の上限が著しく引き上げられ、また弥生時代にあっても、その最初期からすでに鉄器を使用⑤していたことが確かなるなど、考古学の目覚ましい発達によって幾多の新知見が加わり、時代区分の上にも修正を加える必要が生じてきた。したがって、一部の学者の間では、先史時代を人類の出現から縄文文化までの石器時代に当て、弥生時代を古墳時代とともに原史時代に繰り入れるようになってきている。⑥

(二) 厚みのある先・原史地域の時間的区分 先史地理学にあっても、過去の地域の時代区分は、小牧実繁教授以来大体考古学上の時代区分に拠ってきた。ただ考古学の場合と違うところは、原史時代の地域を先史時代の地域に含め、狭義の歴史地理学に前置せしめて扱ってきたことである。

ところが、その後藤岡謙二郎教授は、従来の先史地理学を広義の歴史地理学の構成部門として位置づけ、さらにそれを、狭義の先史地理学と原史地理学に区分し、それぞれの時代の特質に対応した地域の時代区分を示されるに及んで、研究の対象領域が一段と明確になってきた。以下かいつまんで、広義の歴史地理学における、先・原史時代の時間的区分の変遷を辿ってみることにしよう。

先史地理学を提唱し、その方法論を樹立された小牧実繁教授は、一九三七年、「先史地理学研究」を出版された当時、歴史地理学を文献による歴史地理学と解され、^⑧先史地理学は、それより前の時代の土地・地域（景觀）を研究する新しい学問であるとし、かつ、先史地理学が取り扱う地域の時代を、「人類の出現以後歴史の黎明に至る間の先史時代」^⑨であると考えられている。教授の先史地理学においては、その対象となる先史時代を、人類の出現から歴史の黎明までという漠然とした表現で示され、それに含まれた時代の細かな区分が明らかでなかった。しかし実証的に研究された多くの論文や、文献地理学^⑩に前置されているところから推して、先史時代の概念の中に縄文・弥生および古墳時代が含まれており、その後今日に至るまで、狭義の歴史地理学と先後の關係で前置される時代の概念として広く使われている。

ついで藤岡謙二郎教授は、一九五三年に刊行された新地理学講座歴史地理学の中の「先史地理学」において、先史地理学を広義の歴史地理学に含め、時間と資料の観点から次のように分類せられた。^⑪

すなわち広義の歴史地理学をA時間的分類とB資料的分類とし、Aの時間的分類は1先史地理学 Prehistoric geography, 2歴史地理学 Historical geography に分け、Bの資料的分類は1考古地理学 Archaeological geography と文献地理学 Philological geography とに分けておられる。

当時教授は、先史地理学を考古地理学に、狭義の歴史地理学を文献地理学に対置させ、「先史地理学が歴史地理学に対する名称とした場合は、地理学からする先史時代は原史時代をひろく包括させることが出来る」とし、^⑫小牧実繁教授以来の伝統を承けついで、原史時代を先史時代に含めて扱っておられるのである。

さらにその後一九五五年に画期的な「先史地域及び都市域の研究」を公にされ、歴史地理学と先史地理学との關係

や、先史地理学が対象にする範圍と限界など、広義の歴史地理学の体系の中において論及せられ、その中で初めて原史地理学という新たな部門を提唱されたのである。^⑧ すなわち広義の歴史地理学の中のA時代的分類を1先史地理学 Prehistoric geography と2歴史地理学 Historical geography に分け、1の先史地理学をさらにa先史地理学 Prehistoric geography とb原史地理学 Protohistoric geography に区分され、「同一時代の文献の有無による時代区分からすると、この古墳時代は原史時代に当るのであるから、当然原史地理学の対称とすべきものである」^⑨と述べ、従来の先史地理学を狭義の先史地理学と原史地理学とに区分せられたのである。

かくして永く漠然としていた広義の先史地理学の対象領域は、狭義の先史地理学のほかに原史地理学という新たな

		時間的分類	資料的分類	
地理学	歴史地理学	先史地理学	考古地理学 文献地理学 間接的 直接的	
		原史地理学		
		有史地理学		
	現代地理学	遺跡地理学		

名称の研究領域をもつことになり、研究者を混迷から救い、かつ広義の歴史地理学の体系の中に地位が与えられたのであって、大きな意義があるといわねばならない。

(三) 一つの試案

ところで、先述したように考古学上の新知見の増加や、考古学と違って歴史地理学にあつては、人文事象や文化地域と共に自然地域を考慮に入れる必要があることと、今一つは、歴史地理学と名づけた諸学者の著書や論文には、広義とか狭義とかといった冠詞を付けて区別しなければならぬように、広義の歴史地理学の部門内で名称が重複し、名称と内容とが混乱して論点相違が起り易い。そこで実際の研究上の要請から、歴史地理学に関する諸先学の理論的根拠と、藤岡謙二郎教授の樹てられた歴史地理学の体系に則つて、後に挙げる理由に基き一つの試案を記し叱正を仰ぐことにした。

第三紀以前の古い地域の研究は地質学の領域に属し、人類発生以後の自然地域は第四紀学によって研究されている。広義の歴史地理学は、人類出現以後の過去の人文地域とその地理的事象を対象にして、これらを地理学の立場から研究する人文科学^④である。したがつて、単に過去の地域の人文地理学のみならず、地誌学もあり、^⑤現代地理学^⑥の場合と同様環境論と地域論によって研究されるが、時間の範疇に属しているので地域変遷史的に攷えるところに特色がある。^⑦

さて試案では、次の表に示すように、歴史地理学を、厚みのある地域の時代毎に、それぞれの特質をもつた時代の地域を対象にして、先史地理学 Prehistoric Geography・原史地理学 Protohistoric Geography と有史地理学 In-historic Geography に分類した。そして考古地理学 Archaeological Geography は、考古学に歴史(有史)考古学

石地域」と呼ぶことができるし、有史地理学の前におかれた先史地理学と原史地理学を纏めて呼ぶときは、史前地理学と言ってもよいであろう。

なお、現在の地表に遺っている遺跡を地理学の研究対象にする場合遺跡地理学の成立が考えられる。しかしこの遺跡地理学は、歴史地理学と不可分な関係をもっているが、歴史地理学ではなく現代地理学の分野に属すべきものがある。

また先史原史有史の境い目は、後述するように、地域によって文化期の上限や下限にずれがあったり、文化の様相も、革变的とは言え、実際には漸变的な交代を示しているので、何年以前とか何年以後といった厳密な区分をすることは無理である。むしろ、概括的な区分を示しておいた方が穏当で、先史時代に含まれる地域は、列島に人類が始めて出現した洪積世の無土器文化の時代から、縄文文化の末までの利器に専ら石器を用いていた原始の時代とし、原史時代の地域は、鉄器が使われ、稲作が普及していった大体西暦前二世紀頃^⑨から西暦七世紀の中頃^⑩までの、日本国の黎明期の地域としておく方が実際的である。

次に、弥生時代の地域を先史地理学の対象からはずし、古墳時代の地域とともに原史地理学の対象に入れた理由を列記しておく。

(1) 縄文文化の前に数万年にも及ぶ無土器文化の存在が明らかになったので、^⑪古墳文化の末の地域までも先史地理学に含まれると、あまりにも空間の厚さが厚過ぎて、その中に幾つかの可成り著しい異質的な文化の時代を含むことになり、一つの厚みある空間として把握することが困難である。

(2) 厚みのある先史地域と原史地域の時間的な境い目には、自然環境の上に顕著な変化が見られないが、原史時代以降になって一地域によっては必ずしも一様でないが一般に沖積化が進み、稲作を發展させる地形を造ってきたと

考えられるので、甚だ消極的にはあるがこれも一つの条件になるであろう。

(3) 利器の上から言つて、石器や青銅器を併用しながらもすでにその最初期から鉄器を使つていた弥生時代は、^⑤古墳時代とともに原史時代の地域とした方が合理的である。

(4) またこれを経済体制の面からみると、捕採経済を主体としていた縄文時代以前と、稲作や畑作などの栽培農業が支配的な生産様式になった弥生時代との間には顕著な差異があるし、^⑥ことに弥生時代の経済構造は古墳時代と不可分のな連続的關係をもっている。

(5) さらに社会構造や政治体制にあつても、弥生文化の時代になって、経済体制の画期的な発展に伴つて急速な變化を生じ、縄文時代と弥生時代以降との間に大きな相異が認められる。^⑦

(6) 弥生時代には直接的な文献的記録は遺存しないが、しかし、中国人の手で日本の記事を録した山海経や論衡、漢書、後漢書や魏志とか、語部の口伝を録した古事記や、当時遺存していた文献的な記録を編纂した日本書紀のような、間接的な文献的記録がのこっている。したがつて、その量や質が貧弱であるとしても、古墳時代と共に原史時代と呼んでも決して不当ではない。

右のような理由から考へて、これを巨視的にみると、弥生時代の地域は古墳時代の地域とともに、先史から有史に移る過渡期としてとらえられ、一つの纏つた時代の地域として把握することができるのである。

二 地域的な文化の傾斜

時代的地域の時間的な区分に関連して、文化—正確には文化期—の地域的なずれが問題になる。無土器時代や縄文時代のように、文化の發展速度が緩慢で永く続き、厚い空間としてとらえられる時代の場合は殆んど問題にならない

が、文化期の境目や、文化小期のように薄い時の断面では、先進地域と後進地域とは著しい文化の内容に差異がある。例えば、縄文晩期と弥生前期の場合がそれで、先進地域の西日本では弥生文化が栄えていたにもかかわらず、中部山岳地方以東の地域では縄文文化が続いている。ことに、本州の北端から北海道にかけての地域では、弥生時代が終るまで縄文系文化の残照が続いており、著しい文化の傾斜を示しているのである。^②

文化史の研究にはさほど問題にはなるまいが、時間を横に切った空間（地域）を研究する歴史地理学にあつては、文化の地域傾斜自体が重要な研究の課題になるので、実際の研究を行う場合、時代と地域との関係が直接問題になるのである。このような、文化の地域的な傾斜をもつた過渡期の空間には、今のところ一般に通用する適当な名称が与えられていないので、表現がまちまちになり、論点相異を生じて論議の内容に混乱を生じ易い。

文化の様式の地域差は、早くから、文化遺物の編年的研究を行う先史学者や考古学によって続けられ、また近年は、マグネやラジオカーボン法による実年代の研究から、文化相の特質と実年代との関係と共に、その地域的な傾斜の研究が年代学者によって進められている。^③

地理学の場合、この種の研究に必要な基礎資料を考古学や年代学に仰がねばならないためもあつて、突っ込んで研究した実例が殆んどなく、先・原史地理学の研究上大きな盲点になつている。

三 先史地域および原史地域の把握

歴史地理学が地理学の一部門に属している以上、究極において、現在の地域をより奥深く理解し、系統的に解明する一つの方法的な分野であることは言うまでもないところである。そしてまた、歴史地理学自身がつ個有の任務と独自性が、一応現在の地域から切り離れた、過去の地域を地理学の立場から研究するところにあることもまた、多言

を要しない。したがって歴史地理学は、歴史のための婢女でもなく、直接に現在の地域を歴史的に説明する学問でもない。この間の関係は、化石化してしまった過去の地域を対象にする、先・原史地理学の存在を考えれば自から明らかである。

さてここでは、先・原史地理学が研究の対象にする先・原史地域を、どんな観点と方法でとらえたらよいかという問題について考えてみよう。

先・原史地域をとらえる基礎的な理論や方法として、次に記す先学の諸説をあげることができる。すなわち、小牧実繁教授の断面復原説、藤岡謙二郎教授の地域変遷史論と時の断面投影比較説、神尾明正教授の地層の層序からする時の断面編年説などがそれである。

「先史地理学研究」において示された小牧教授の見解は、「先史時代に於ける時の断面に於ける土地・地域(景観)を復原するのが先史地理学の使命・職能」^⑤であるとされ、著書の全体を通してみると先史時代の任意の地表空間を再現し、その上で地理学的考察を加えようと考えられているように解される。

これに対して藤岡教授は、現在を「歴史的現在」と考え、^⑥「現実の地域空間を過去のそれと結び合せ」^⑦、「現在の地域理解における地域変遷史的立場」^⑧にたつて、過去の地域を「常に現在のそれを媒介して」^⑨、「その時代までの前時代の空間が投影」^⑩された、「厚みをもつ先史地域全体」^⑪として把握されている。

すなわち教授は、任意の時点における静止した空間や、各文化期からなる小画面を考慮に入れた上で、それらを包括した先史時代の地域の全体を一つの厚い空間としてとらえ、前後の空間を動的に相互に比較しながら、現在の地域にまで及ぼそうとする地域変遷史の、厚みある一時期の地表空間として考えておられる。そして教授は、先史地域を

具体的に表現する方法として、細分した各文化期をそれぞれの時代の末の空間に投影すると共に、さらにそれらを包括した先史地域として、先史時代の末（弥生時代の末）の空間に投影した画面としてとらえようとされているのである。^③

一方神尾教授は、地層の層序から過去の生活地表を復原し、それらを順次編年しながら現在に及ぼそうとされている。^④ 時の空間を復原し、これを現在の地域にまで及ぼそうとする点で、藤岡教授の地域変遷史論に似たところがあるが、その立場や方法において著しい違いがある。すなわち教授の方法は、地層の層序に遺っている過去の住民が生活したミクロな生活地表を、地学的な立場に立って一枚一枚はがし取り、具体的に可視的なものとしてとらえようとしているのである。

この方法は、堆積地形の地域でのみ可能で、広大な侵蝕地形の地域については、堆積地形で得た編年から類推するほかはない。また洪積層や沖積層の地域でも、すでに削剝されていたり、再堆積しているところでは擾乱を受けているので、地表を連続した地域として復原し編年することがむづかしく、かつ厚みのある時代の地域として、広い地域をとらえることが困難である。

両者の見解を要約すると、藤岡教授は包括的に厚みのあるマクロな地域としてとらえ、神尾教授は、分析的な薄いミクロな生活地表としてとらえようとし、前者は、広い地域にわたる時代の特質を地域に結びつけ、総括的な、時代の地域全体の性格を把握する上で重要であり、後者は、局地的な狭い生活地表を具体的に示す点に特質があつて、多くの点で対蹠的である。

またこのほかに、先・原史時代の文化地域や文化事象を復原する方法として、一般に広く使われている考古学的復

原法や、三友国五郎教授の提唱される社会経済史的、民族学的類推法などがある。

考古学的復原法は、言うまでもなく現在の地域に遺存する文化遺物や遺跡（文化化石）とその包含層（文化化石層）とから、先・原史時代の地域や人文現象を再現しようとする最も直接的な方法である。文献を欠く時代を研究する何れの学問でも、大なり小なりこの方法に依存しており、最も基礎的な方法ないし手段であるということができよう。しかし資料の性質上、自から限界があつて、生きた具体的な姿としてとらえ得ない点に欠陥がある。

三友教授は、縄文初期の集落に示現された地域の社会集団から、同種の土器を出す文化微小期の小文化圏を考へて、その内部構造を総合的かつ具体的に把握し、化石地域における集落を生きた地域現象としてとらえる方法として、社会経済史や民族学的類推法の採用を主張しておられる。^⑤先・原史時代の人文現象を地域現象として把握する場合、民族学的類推法は、過去の地域的事物や事象の構成要素を、有機的に生き生きとした姿相として、具体的かつ全体的に想像できる重要な手段ではあるが、類型化して推測する謂ば間接的な三角形的逆推法なので、先・原史地域そのものの現象の実態をとらえることはできない。

さて、右に見た諸見解には、重要な基礎的理論や具体的で有効な方法が含まれている。そこでこれらの理論と方法の特質を生かし、先・原史地域を把握する方法として、次のように組み合わせ活用することが考えられる。

すなわち、基本的な立場を地域変遷史論において、具体的には、まず上記の諸方法により文化微小期毎の生活地域を復原する。ついで、環境との関係や厚みのあるマクロな地域の包括的な地域性を掴む「時の断面投影比較法」と、一方、地局的なミクロな生活地表が析出できる地層の層序から復原する「時の断面編年法」との、対蹠的な両面から推し進め、さらに、世界史的類推や民族学的類推法によって、生き生きとした景觀や生活態容を推測して復原し、ダ

マクロな地域		ミクロな地域		
文化期的地域		文化小期的地域	文化微小期的地域	生活地表
先史地域	I 無土器文化地域			文化化石層の層序による生活地表
	II 縄文文化地域	早期の地域	土器型式の編年による地域	
		前期の地域		
		中期の地域		
後期の地域				
原史地域	I 弥生文化地域	前期の地域	土器型式の編年による地域	
		中期の地域		
	II 古墳文化地域	後期の地域		
		前期の地域		
地域構造と		地域性		

イナミックで具体的な地域として、総合的に把握しようというのである。次の表にこの関係を示しておこう。
 なお右の何れの方法においても、多かれ少なかれその基礎資料は、先史学と考古学上の知見や、自然地域を研究する第四紀学に関連をもった諸分野の成果に依拠するこ

とは言うまでもない。

四 先・原史時代における人文地域の検討

広く先・原史地域に関した地域区分の必要性やその具体的方法については、藤岡謙二郎教授によって理論とともに実証的研究が示され、後進学徒に拠るべき指針が与えられた。⁹⁹ 筆者もまた教授の指導のもとに、先史地域の説明図といった程度の極く概括的な先史地域区分を試みたことがある。¹⁰⁰ ここでは地域論の角度から、二・三先・原史時代の人文地域の問題を考えてみることにする。

(一) 先・原史地域の考察の前提

分布と分布図 分布や密度は立地と共に、先原史時代の地表空間の場所的ないし地域の固定や、地域の変遷を迹付ける上に不可欠な基礎的概念である。先原史

時代の地域の上に場所を占める地理的事象や景観は、古墳その他の特殊な記念物が地表に遺存しているほかは、自然の削刺作用や、工事などの偶然的な事情と、発掘調査などによってその一部が遺跡として露頭を現わしているにすぎない。したがって、分布や密度としてとらえられる遺跡や遺物の発見地も、上記の条件のほか、調査者の偏在や、調査の精度にむらがあるので、作製された分布図は偶然的な要素を含んだ蓋然的分布図ないしは傾向的分布図として理解しておかねばならない。密度の場合もまた同様なことが言える。また、遺跡や遺物の発見地は年々その数を加え、絶えず分布や密度に変化を生じているので、時の断面や、厚みのある空間を投影した分布図は、可変的分布図の性質をもっている。

このようにみてくると、分布に基礎をおいた地域の論議は、右の事情を考慮に入れ、常に「現段階における」という前提を含めて推し進めねばならない。したがって、分布を扱った研究の成果も、厳密に言えば、可変性を含んだ蓋然的傾向的な帰結にすぎないので、先・原史地域を研究する場合、この点に充分注意しなければならぬ。

点・線・面 化石化してしまった先・原史時代の地域（景観）は、生きた現在の地域（景観）と同様点と線と面から構成されている。村落遺跡は、面としての空間的な広がりをもっているが、これも巨視的に見ると点である。しかもわが国では、一村落を完掘した遺跡は極めて少なく、大部分は遺物散布地や包含地のような村落推定遺跡であったり、住居址・宅地・広場や墳墓などの村落を構成する個々の要素である場合が多い。

線としての交通路は、登呂の農道^⑧を除くと道路を掘り出した例がなく、直接交通遺跡から復原することは至難である。現在、先・原史時代の交通路として示されているものは、遺跡や遺物の所在地と、分布と密度や、後世の交通などから地形と結びつけて推考した推測的交通路である。

耕地のような面としての遺跡も少なく、今のところ登呂^㉔や安国寺^㉕などで掘り出されているにすぎないので、付近の地形を復原し、当時の可耕地を推定する以上を出ないのが実状である。

このように、先・原史時代の地域（景観）は、それを構成する構成要素の殆んどが、点としての遺跡や遺物の発見地なので、それらを地形に結びつけ、線としての交通路や、面としての耕地と狩場を推定した上で、広がりをもった地域（景観）として想定した謂は推測的地域（景観）なのである。従って研究者はもちろん、研究物を利用する人達も、右の諸点を考慮に入れた上で用いねばならない。

(二) 先・原史時代の文化地域 先史地域や原史地域は、現在の地域と同様目的や観点によってさまざまに分類することができる。

調査や研究の便宜上あらかじめ設定する形式地区（形式地域）と、調査と研究の結果、地理的事象や景観の特質によつてその分布範囲を区分する実質地区（実質地域）とに分けられるが、^㉖ここでは人文地域のうちでも実質地域について考えることにする。

実質地域は、先・原史地域の場合理論上、均等地域 *homogeneous region*（等質地域 *uniform region*）と統一地域 *nodal region* や、統一の実在としてとらえられた総合的な地理学的地域 *geographical region*^㉗とに分けることができるが、しかし実際には資料に制約されるので、それぞれの時点の空間の限界を厳密かつ具体的に区分することは困難である。

均等地域は、比較的とらえやすいのでその例が多く、例えば、文化の特質とか生産様式や、土器、石器、金属器の型式や様式などを指標 *criteria* にした分布区がそれで、さらに細分された指標からさまざまな均等地域を描き出す

ことができる。縄文式土器や弥生式土器の分布から、縄文式土器地域と弥生式土器地域が描き出され、またこれを、土器の様式に地域の文化相が表出されていると看做す場合は、縄文文化地域や弥生文化地域としてとらえられるし、さらにそれぞれの文化小期や微小期毎に均等地域を描出することも可能である。具体的に言うと、縄文早期の土器を指標にした北海道押型文化地域、田戸・住吉町系文化地域、井草・稻荷台系文化地域、押型文化地域、曾畑系文化地域などの文化地域もその一例である。^⑥

また石器についてみれば、硬玉製品の分布地域や、^⑦黒曜石^⑧・サヌカイト製品の分布地域、縦形石匙と横形石匙の分布地域、有柄石鏃や無柄石鏃の分布地域^⑨なども描出できるし、金属器の場合も、銅剣・銅鉾・銅鐔の分布地域^⑩や同氈鏡の分布地域^⑪なども、形式や様式という観点から見れば一種の均等地域として擷むことができる。

先・原史地域を分析的な指標で描出し、それぞれが分布区で一様性を示す静態的な均等地域は、薄い空間としても厚い空間としてもとらえられ、それ自身絶対分布図として意味をもっている。このような方法で描出された個々の均等地域を、地理学の観点から相互の関連に検討を加え、後述する実質地域や自然地域との関係を考慮しながら重ね合わせることによって、総合的な地理学的地域、すなわち地理区に纏めあげることができる。このような、先・原史時代の均等地域の描出を地理学研究の立場からみると、先・原史地域の分析的研究の手段であると同時に、先・原史地理区設定の前提的作業であり、描き出された均等地域の分布図は、それ自身、活用範囲の広い資料としての価値をもっている。

次に統一地域は、機能地域あるいは結節地域と呼ばれるように、核心的組織体とその関係地域とが、同一の機能で結合した動態的な完結地域であって、^⑫核心と支配圏(吸引圏・交渉圏・影響圏)といった、核と圏の概念でとらえ

られる非可視的な有機的地域である。これを先・原史時代の地域に当てて考えると、地理的現象や景観が化石化してしまっているために具体的な結合関係を地域の上でとらえ難く、従って統一地域として復原することがむづかしいので実証的な研究例が少ない。

先・原史時代の統一地域は、結合の条件や結合地域の広狭によって、質的な強弱の差が見られる。すなわち、中核になる組織体と結合する場合、文化圏とか交易圏のように、比較的単純な条件や包括的な弱い条件で結びついた広い地域と、村落共同体とその生活地域とか、弥生前期の部落国家のように、日常生活や政治・経済・社会・文化などの複合的な要素で、密接に結合した強くて比較的狭い結合地域などがそれである。また、均等地域としてとらえられるものの中にも、角度を変えて見ると石器や青銅器などの分布地域のごとく、指標とした遺物が、生産地と輸送や消費地といった一連の需給関係で、核心地と有機的な関連をもっているような場合がある。例えば、姫島産の黒曜石の分布地域も、原石の産出地大分県姫島を中心とした消費圏として、需給関係で結合した統一地域としてとらえることができる。また銅剣・銅鉾の分布地域も角度を変えて、需給関係から見ると分布圏とみることができる。すなわち、熔沁を出す九州北部を中心とする地域と、それを出さない広い分布地域との間には、銅器の需給関係を通して結合関係が考えられ、銅器に象徴される政治・社会・経済・文化などで結びついた一種の統一地域である。

このほかに、弥生時代の部族国家や小民族国家などの統一地域が考えられるが、これらの具体的な政治中心地とその版図は描出することが困難である。ただ古墳時代の国造については、歴史学や考古学の分野から研究が進み、行政の中心地や行政地域の大体を推定することができるようになってきた。^⑧

次に、先・原史時代の結節地域とみられるもののうち、最も狭くて結合が強い地域的社會集團、すなわち村落共同

体を中心とした生活地域についてみよう。

これらは共同体として有機的に結合した村落を核心に、その村落を支えていた生産地域（狩場・漁場・農場）とが不可分的に結びついた、統一地域の中でも最も小さい機能的単位地域である。村落遺跡は、先述のように完掘された例^⑥が少ないけれども、住居址や墳墓など、村落の一部を発掘している例は頗る多く、しかも地形と直接結びつけて研究できるので可成り具体的に描き出すことができる。

村落の機能や内部の構造と規模は、文化期や場所と地域によって必ずしも一様ではない。無土器時代の村落の構造は今のところ明らかでないが、縄文・弥生・古墳時代を通して概括的に言うると、普通、村落の内部には数軒から十数軒の住居が集って、貯蔵庫と広場や墓地・園地などの付属施設をとまなっている。また、中部地方以東の縄文前期から後期の時期には、環状列石のような特殊建造物^⑦をもっていたり、弥生・古墳時代の村落には溝状や土堤状の囲郭^⑧を繞したものもある。

生産地域もまた村落の機能によってさまざまである。主として捕採経済に依存していた縄文時代の村落では、周囲の山野が狩場であったり、前面の湖海が漁場になっていたと思われるが、これらは地域として正確に固定することができる。弥生時代の農耕地は、前述のように可視的にとらえられない場合が多いが、地形を復原することによって水田の可耕地が推定でき、高地性村落遺跡の立地と分布から、山腹や台地の畑作可能地を想定することができる。^⑨

五 先・原史地域における景観の変貌

変貌という語の含む概念は、語源の問題は別として、これが地理学上の用語として使われる場合、近似な意味をもった変容や変遷と並べて比較すれば自から明らかになる。すなわち、変貌は、一般に狭い地域における短期間の外観

的な変化を指すときに用いられ、変容は外觀的な形状という意味とともに質的な内容を含んだ変化を示す場合に使われる。また変遷は、両語の意味よりもさらに広く、外觀と内容を含んだ、長期間の広い地域を指すときに使われるようである。

したがって地域の変貌という言葉は、比較的狭い地域の短い期間に見られる外觀的な変化、すなわち景観の変化を指す場合に用いる方が妥当であろう。しかしこのような狭い意味のほかに、変容や変遷を含めた広い意味に使われることがある。

ここでは、厚い空間を取り扱う先・原史地域の特質上、狭い意味を含めて広い意味に使い、先・原史地域の主に景観の変化について、筆者が調べた二つの例をあげておくことにする。

(一) 秋吉台地の景観変貌 筆者は先に、浜田清吉教授^⑤の後をうけて台上の組織的な地表探査を行い、発見した考古学上の資料に基いて大まかな文化期上の編年を試み、人類居住の変遷を考えたことがあった。^⑥ここでは、遺物の特質と、それらの示す人文生態を地形や植生に照し合せ、台面での集落景観の推移と植生変化の関係を推考してみよう。

現在秋吉台は、カルスト高原特有の自然環境が生産活動や永住に不適當なため、台面の縁辺にある樹林地に開拓村落があるほかには、永住の民家は全く見当らない。台面は緩かな起伏のある波状の高原で、丈の低い温帯草原の雑草が蔽い、夥しいドリネとウバーレや、カレンフェルドが景観に独特な変化を与えている。数少ないスプリングのほとりに広葉樹が茂り、開拓者が拓いた小さな畑が赤いテラロッサの地肌をみせ、台面の一隅に、科学博物館や展望台などの近代建築が陽光に映えているといった景観である。

集落の廢墟と推定される確かな遺跡は、三箇所の縄文遺跡や、一箇所の弥生遺跡と、中世の遺跡三箇所であるが、遺物発見地は右のほか、縄文式約十地点、弥生式一地点、中世のもの七地点である。このように縄文関係のものが最も多く、中世、弥生の順で、確かな古墳時代のものは全く見当らない。また縄文式の遺物には、今のところ早期や前期のものが殆んどで、弥生式のものも中期に限られている。窪や久保と名のつく遺跡の地名が語るように、台地でも低い場所のドリネ間の分界面とか、ウバーレ底に見出され、しかもそれらは、縄文と中世のものが重複したのが多い。なおこの台地には、いたるところに、なく、すなわち鉄滓がころがっており、かつて付近に、たらがあつたことを示唆している。

さて、以上の資料から考えると、この台地での人類の出現が縄文早期からであることがわかる。そして彼等は、前期頃まで居住しているが、中期になって姿を没し再び弥生中期になって現われ、さらに有史時代の中世になって村落を営んでいるというように間歇的に居住していることがわかるのである。

このような居住の間歇的な変遷は、人類の台地の利用に関連して植生の変化と深い関係があるように思われる。すなわち氣候が温暖であつた縄文初期には、^⑧今も台地の一部に残っているような広葉樹の原始林が茂り、現在、カレンフェルドになつてゐるような削剝の進んだところは当時草原であつたらしく、樹林と草原が織りなすまだら模様^⑨の景観を示し、強風を防ぐ森林の中で、狩猟を生業にした縄文人達が湧泉のほとりに村落を営むことができたのではないかと思ふ。

縄文中期から晩期にかけての遺物や遺跡は見つかつていないが、確かになかつたと断言できないので、これから植生の変化を推考することはさしひかえねばならない。ただ弥生時代に、全国的に高地性集落が発達した中期に限って

石鏃の少ない村落が出現していることは、当時焼畑が行われていたことを暗示しており、これが森林の減少と草原化を生じた一原因ではなかったかと考えられるのである。また台面から住民が姿を消した古墳時代には、現在に近いような草原景観に変わっていたと思われるのであるが、その直接的な原因が長登りの銅山や、台面に散布する鉄滓が示唆するように、製錬用の新材として伐採されたためではないかと予想されるのである。

ところで以上は、秋吉台地の景観の変貌を、地表探査で採集した資料から考古地理学の面から推測したにすぎないので、なおその前提に、他の分野からなされねばならぬ幾多の問題が横わっており、今後、それらの研究の成果をまとめて考察を進めねばならない。

(二) 山口県島田川中流の天王遺跡群にみる原史村落の変貌 天王遺跡群は、周南丘陵を潤して周防灘に注ぐ、島田川中流の丘上に遺った原史時代の村落遺跡である。かつて山口大学島田川遺跡調査団が調査を行い、天王遺跡群はこのとき発掘せられたが、^⑤ 筆者はその後にも引き続き調査と研究を続けてきた^⑥。

これらの遺跡は、^{三丘盆}地の北東隅につきでた台地状の三つの丘の頂に立地し、島田川支流の中村川と石光川の狭い谷で隔てられている。この遺跡群のうち、主な村落遺跡は、天王、岡山、石光の三遺跡で、成立の時期が多少づれている。

最も早く成立したのは天王遺跡で、三つの丘の中央の、斜面が急で頂の平たい、比高三五米内外の花崗岩丘に位置を占め、弥生時代の前期の末から中期以後、古墳時代に及ぶA・B・C・D・Eの五つの遺跡と、二つの後期古墳とからなっている。その西にある岡山遺跡は、中村川の谷を挟んで天王遺跡に相對している。ここでは、比高四〇米内外の頂上が平坦な花崗岩丘の上に、古生層の小丘があって、その付近に、弥生中期と後期終末の村落址が重複してい

る。また石光遺跡は、天王台地の東に当る石光川の谷を隔てた、丘陵の上にある小村落の廢墟である。

これらはいづれも農業村落の遺跡で、米・大豆・小豆・緑豆・梅・桃・あんずなどの、園地や畑地と水田の存在を示す炭化した栽培植物の果実を出している。^⑧現在の民家はすべて山麓に群在し、台地の上に畑が開け、黒松や赤松と雑木林になっているが、岡山遺跡から掘り出した植物遺体の中から、密林下に生育するミツキや、多くの広葉樹の材が検出され、当時は、今も山麓に見るような常緑の広葉樹林が茂っていたことを物語っている。^⑨

さて、以上の知見を総合して、原史地理学の見地から推考される原始時代の村落景観の変貌を描写してみよう。

島田川河畔の、天王台地に茂った原始林を伐り拓いて、初めて農村が成立したのは弥生時代の前期も末、中期の初め頃のことである。彼等は、河畔の低地を見おろす、展望に優れた台地端に集落を営み、その東北の境には巨大な空濠を掘り、同じ丘の東北端に箱式石棺の墓地区（天王C）を設けた。人口が増加するにつれて、間もなく西隣の岡山おかのやまの頂に子村をつくり、中期の末か後期の初頭には、さらに東の石光の丘の上にも分村を営んで、ともに墓地を共有する親村と子村が成立した。そして、当時彼等は、住居の周りに桃や梅・あんずなどの果樹を植え、丘の上で畑を耕し、山麓に水田を営んでいた。

ところがこれらの村落は、後期前半の頃丘の上から姿を消し、村落は廢墟に変わったのである。しかし今のところ、なぜ村落を放棄したのであるかという確かな原因はわからない。

その後再び、弥生時代から土師時代に移る過渡期の頃、岡山と天王Bとの二つの丘に村落がつけられて、彼等はその墓地（天王C）に壺棺墓を営んだ。やがて古墳時代に入ると、一斉に低地に降って、現在の村落と同ような、天王台地の西麓（天王D）や、島田川を隔てた川尻などの低い場所に住み、この期の末になると、天王台地の上にある

弥生時代の村落があった場所に、ムラの首長の奥都城を築くようになったのである。^②

右に述べた、村落景観の変貌の描写に用いた基礎資料や、村落の変遷に及した営力については、すでに詳しく書いたことがあるので、^③ここでは繰り返さないこととする。

なお、二箇以上の統一地域の縁変が接触し交錯する場合には、質的な変貌(変容)を生じて漸移地域(地帯)を形成することがある。ことに一方の統一地域の中核的組織体が優勢で、勢力圏を地域的に拡張し、異質文化圏を被覆し滲透するようなフロンティアにおいて特に顕著である。例えば、縄文文化圏に弥生文化圏が張り出して、中部山岳地方から東北地方にかけて接触土器文化地域を生じたり、^④大和政権の勢力が夷蝦地に拡張していった古墳時代から、奈良・平安時代にみる政治・経済・社会や文化の変貌(変容)もその好例である。^⑤

むすび

化石化した厚い空間を扱う先・原史地理学は、その基礎資料に制約されて広い地域の復原がむづかしく、推測的地域の概括的な考察に止まるか、局地的な狭い地域の研究に限られやすい。しかも考察の前提になる基礎学料の研究もなお跛行的な現状なので、具体的な地域の復原とそれに基く地理学的研究が困難である。また先・原史地理学自身の場合、有史地理学の分野に比べて実証的な研究例が少なく、理論的基礎の研究とともに、特に、組織的な実証研究を推し進めねばならないことを痛感するのである。

註

(1) 浜田耕作・通論考古学 一七—一八頁・駒井和愛編 考古学概説 二二—二三頁。

後藤守一・日本考古学 四—五頁。

小林行雄・日本考古学概説 一三頁。

- (2) 森本六爾・日本青銅器時代地名表（岡書院、昭、四）のように、昭和の初期まで、弥生時代のことを日本青銅器時代という別名で呼ばれていたこともある。

- (3) 直良信夫・葛生前河原洞窟と同所出土の人類化石骨（考古学雑誌三八の二） 一一二頁。

直良信夫・日本旧石器時代の研究（寧楽書房） 一五七―二〇一頁。

清野謙次・日本に於ける初期石器時代の文化と住民（考古学雑誌三八の二） 三二―四九頁。

鈴木 尚・日本人の起源（歴史教育七の三） 一一二頁。

鈴木 尚・牛川鉱山で発見された洪積世人類の上腕骨（科学一九五九） 三九八―四〇二頁。

- (4) 清野謙次・前掲論文 三二―四〇頁。

直良信夫・前掲書 一六一―一六三頁。

杉原莊介・日本における石器文化の階梯について（考古学雑誌三九の二） 二二―二五頁。

芹沢長介・先史時代Ⅰ 無土器文化（日本評論新社） 昭、三二年。

- (5) 和島誠一・西日本における古代鉄器中の炭素量（資源科学研究所彙報第四八号） 五三一―五六頁。

乙益重隆氏は、熊本県玉名郡齋藤山貝塚において、夜臼式土器を伴った板付式土器とともに、鉄製の鋤先を検出し、筆者は山口県豊北町角島沖田遺跡出土の遠賀川式土器の底部に、鉄製品の断片二箇と、粗の圧痕一箇をもつ土器を実見した。これらから見ても、鉄製品は弥生時代の最初期から使用されていたことがわかる。

- (6) 駒井和愛・八幡一郎氏監修の日本評論新社刊「考古学ノート」には、先史時代をⅠⅡとに分け、原史時代に弥生文化と古墳文化を含めている。

- (7) 小牧実繁・先史地理学研究（内外出版印刷） 九八一―二二頁。

- (8) 小牧実繁・前掲書 一〇六一—一〇七頁
- (9) 藤岡謙二郎・先史地理学(新地理学講座第七卷歴史地理) 三二—三三頁。
- (10) 藤岡謙二郎・前掲書 三二—三三頁。
- (11) 藤岡謙二郎・前掲書 三二頁。
- (12) 藤岡謙二郎・先史地域及び都市域の研究(柳原書店) 五八—五九頁。
- (13) 藤岡謙二郎・同書、同頁。
- (14) リッケルト著 佐竹哲雄・豊川昇訳・文化科学と自然科学(岩波書店) 昭、一四。
- (15) 内田寛一・歴史地理学序説(歴史地理講座第一卷) 一一二頁、一一頁。
- (16) 小牧実繁・先史地理学研究 一〇六一—一二四頁。
- (17) 藤岡謙二郎・先史地域及び都市域の研究 四二—六七頁。同・先史地理学(前掲書) 三八—五九頁。内田寛一・歴史地理学序説(前掲書) 六頁。野間三郎・歴史地理学の発達(歴史地理講座第一卷) 二〇—四五頁。
- (18) 内田寛一・前掲書 六頁。
- (19) 藤岡謙二郎・先史地域及び都市域の研究(前掲書) 四三—六七頁。同・歴史地理学とその研究法(歴史地理・郷土地理) 七三—七五頁。同・先史時代の地理的研究(歴史地理講座 第三卷) 一一—一三頁。
- (20) 弥生文化の起源の実年代は、今のところ明らかにされていない。推定年代についても、西紀前三百年前後とか、前二百年代とする人があって定説がないが、大体西紀前二世紀頃としておく方が穩当であろう。杉原莊介・弥生式文化(図説日本文化 史大系Ⅰ) 一六四頁。清水潤三・倉田芳郎・原史時代Ⅰ 弥生文化(日本評論新社) 二〇—二四頁。
- (21) 確実な直接的文献の存在があり、西紀六四六年に公布された大化改新の詔や、薄墓合などの新法令は、時代の文化を画期的に變革する原動力と考えられるので、大体西紀七世紀の中頃をもって、原史と有史の境い目と考えた。

- 20 註④。
- 21 註⑤。
- 22 八幡一郎・日本史の黎明(有斐閣)一〇三—一六八頁。齋藤忠・日本全史Ⅰ 原始(東京大学出版会)一〇七—二一〇頁。
- 23 中村吉治・日本社会史(有斐閣)一七—八七頁。小野忠潔・弥生時代の共同体(兵団体の研究—理想社)一六三—一七四頁。
- 24 江坂輝弥・縄文文化の起源の研究(歴史教育七の三)八一—九頁。同氏・先史時代Ⅱ 縄文文化(日本評論新社)。杉原荘介・弥生式文化(図説日本文化史大系Ⅰ前掲)一九八頁。
- 25 N. Watanabe: The Direction of Remanent Magnetism of Baked Earth and Its Application to chronology for Anthropology and Archaeology in Japan An Introduction to Geomagneto-chronology. UNIVERSITY OF TOKYO 1959. 渡辺直経・古地磁気研究法による人類遺跡の年代判定(第四紀研究一の三)九二—一〇〇頁。同氏・放射性炭素による年代測定法の進歩。
- 26 小牧実繁・先史地理学研究(前掲書)一〇六頁。
- 27 藤岡謙二郎・先史地域及び都市域の研究(前掲書)五一頁。
- 28 藤岡謙二郎・同書 五二頁。
- 29 藤岡謙二郎・同書 五一頁。
- 30 藤岡謙二郎・歴史地理学総説(新地理講座第七卷)二頁。
- 31 藤岡謙二郎・同書 二頁。
- 32 藤岡謙二郎・先史地域及び都市域の研究 六〇頁。
- 33 藤岡謙二郎・同書 五三—五五頁。六〇頁。
- 34 神尾明正・洪積地質学的編年の構想と準備(千葉大文理学部紀要)昭二八。

神尾明正・わが先史時代の地形面と地形変化に関する二・三の野外資料について(日本地理学会一九五九年度研究報告要旨)

二六頁。

- (35) 三友国五郎・縄文時代早期前期の集落(人文地理二の一) 一一一五頁。
- (36) 藤岡謙二郎・先史地理学(前掲書) 三二―五九頁。同氏・先史地域及び都市域の研究 四二―二五〇頁。
- (37) 藤岡謙二郎・小野忠潔・先史日本の地域的特質(歴史地理講座第三卷) 三六―四二頁。
- (38) 日本考古学協会編・登呂 本篇 昭、三〇。
- (39) 同書。
- (40) 九州文化総合研究所編・大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査(毎日新聞社 昭、三四) 一五八―一六三頁。
- (41) 木内信蔵・人文地理学(至文堂、昭三二) 一一二―一三三頁。木内信蔵・西川治・地域論(新地理学講座第二卷 地域論) 二四五―二八七頁。
- (42) 木内信蔵・西川治・地域論(前掲書) 二四九―二六一頁。米倉二郎・経済地域(地域と経済 朝倉書店、昭、三二) 一頁。
- (43) 江坂輝弥・縄文文化の起源の研究(歴史教育七の三) 八一―一五頁。同氏・縄文文化の起源の研究(史学第二九卷の二) 七一―一〇〇頁。
- (44) 江坂輝弥・所謂硬玉製大珠について(銅鉄一三号) 一一二〇頁。
- (45) 八幡一郎・先史時代の交易(人類学・先史学講座 第二卷・第三卷・第五卷)。同氏・物資の交流(図説日本文化史大系I) 一六〇―一六三頁。
- (46) 酒語仲男・本邦先史石器類概説(人類学・先史学講座 第一九卷)。
- (47) 三木文雄・青銅器(図説日本文化史大系I) 二〇〇―二一七頁。
- (48) 小林行雄・初期大和政権の勢力圏(史林第四〇号) 一一二五頁。

(40) 木内信藏・西川治・地域論(前掲論文)二五七―二五八頁。

(50) 斎藤忠・國造に関する考古学上よりの一試論(古代史談話会、古墳とその時代2)四―五四頁。

(51) 和島誠一・南堀貝塚と原始集落(横浜市史第一卷)二九―四六頁。

近藤義郎・渋谷泰彦・津山弥生住居址群の研究(津山市・津山郷土館、昭、三三)一―三五頁。近藤義郎・共同体と単位

集団(考古学研究六の二)一―八頁。

(52) 文化財保護委員会・大湯町の環状列石。

(53) 鏡山 猛・環溝住居址小論(史淵一、二、三)。小野忠瀨・弥生時代弥生時代の開郭村落の諸問題(地理学評論三二の六)

一―一九頁。

(54) 小野忠瀨・弥生式集落の垂直的遷移現象に関する若干の問題(人文地理一〇の三)一八一―一八六頁。同・瀬戸内における

弥生式高地性集落とその機能(考古学研究六の三)一―六頁。

(55) 浜田清吉・秋吉台の遺物発見地とその遺物(秋吉台カルスト、昭、二八)八九―一二五頁。

(56) 小野忠瀨・考古学上より観た秋吉台(秋吉台学術調査報告、昭、三三)一〇五―一一八頁。

(57) 塚田松雄・花粉分析からみた後氷期の気候変遷(第四紀研究一の二)五三―五六頁。

(58) 山口大学島田川遺跡学術調査団・島田川、昭、二八。

(59) 小野忠瀨・山口県熊毛郡天王遺跡(日本考古学年報 八、昭、三〇)八二―八四頁。同・壘・壕遺構を有する一古代村落址

の研究(山口大学教育学部記念論文集)。同・本州の西端地方における古代の壘・壕遺跡(古代学五の二)一二六

―一三七頁。

(60) 荒木精一・植物遺体の考察(島田川・前掲書)一二九―一三三頁。直良信夫・日本古代農業発達史(さ・え・ら書房)二五

一―二五七頁、二八六―二八八頁。

- (61) 荒木精一・前掲論文 一三三頁。
- (62) 小野忠熙・遺跡遺物より見たる原始時代の島田川流域（島田川・前掲書）一七六一一九〇頁。
- (63) 小野忠熙・岡山遺跡、天王遺跡、島田川流域の遺跡群、原始集落の分布と立地の地理的考察、台地性集落と壕状遺構、原始墳墓と地域性、遺跡遺物より見たる原始時代の島田川流域（島田川・前掲書）。
- (64) 藤岡謙二郎・縄文式文化の性格に同する一二の考察 史林二六の二 昭、一五。
- (65) 山田安彦・先・原史遺跡よりみた東北の地域構造 立命館文学一五三号。
- 同氏・東北日本における律令国家の漸移地帯 立命館文学一六九号。